

トールフェスクの

利用と新品種(2)

農林省草地試験場牧草部
育種第一研究室室長

農学博士 川 端 習太郎

トールフェスクの暖地での 利用についての問題点

トールフェスクは、耐暑性にすぐれているといっても、多少ともサマースランプを起こすので、暖地での利用については当然のことながら、その対策を考えておかなければならない。その対策としては、いわゆる「スプリング・フラッシュ」時の余剰草を乾草あるいはサイレージとして貯蔵し、それを利用することや、暖地型の1年草を別の圃場に作付けすることなどが考えられる。また、今後の問題としては、トールフェスクと混播するマメ科牧草として、耐暑性アカクロバの育成や、暖地型マメ科牧草の導入なども積極的に考慮すべ



きであろう。

なお、トールフェスクは ASP やホッグエイジ用としても、もっとも適した草種の1つと思われるが、今後利用面での検討がのぞまれる。

トールフェスクの新品種

現在、わが国で栽培されている品種の大部分はアメリカから輸入されている「ケンタッキー31」であるが、最近、北海道農試で「ケンタッキー31」よりすぐれた品種として「ホクリョウ」および「ヤマナミ」の2品種が育成されたので、その概要を示しておきたい。なお、これら2品種とも、現在増殖中で、昭和50年秋から多少出廻り、昭和51年から大量に市販される見込みである。

ホクリョウ (トールフェスク農林合1号)

農林省北海道農業試験場において、明治あるいは大正年代に導入され、以後上記試験場内に定着した自生のトールフェスクのなかから選抜を重ね、最終的に27株を選んで合成品種としたものである。

〔特性の概要〕

北海道、東北、北陸の積雪寒冷地帯で高収を示し、標準品種の「ケンタッキー31」にくらべ約20%の増収が期待できる優良品種であって、主要特性はつぎのとおりである。なお、全国各地における「ホクリョウ」およびつぎに述べる「ヤマナミ」両品種の収量を「ケンタッキー31」の収量を100としたときの指数とともに示すと第6表のごとくなる。

イ 出穂期は「ケンタッキー31」にくらべて北海道では約6日、東北地方では15~20日、九州では20~25日もおそい晩生の系統である。なお出穂数かなり少なく、放牧地の管理上きわめて有利である。

ロ 病害に対して抵抗性強く、とくにトールフェスクでもっとも被害の大きいものの1つである網斑病にすぐれた抵抗性を示す。また雪腐れ病にも強い。

ハ 冬枯れには強いが、夏枯れに弱く、夏枯れの激発地帯での永続性は劣る。

ニ 草丈高く、かなり上部まで葉をつける多葉性の品種で、葉も大きい。

第6表：トールフェスクの新品種「ホクリョウ」
「ヤマナミ」の適応性

試験場所	「ホクリョウ」	「ヤマナミ」	「ケンタッキー31」
北海道 天北	4205 (107)	4284 (109)	3930
北見	3189 (119)	2653 (99)	2680
根釧	3288 (122)	2911 (108)	2695
新得	5191 (126)	5026 (122)	4120
札幌	4388 (130)	3814 (113)	3375
東北 北陸	5256 (115)	5073 (111)	4570
新潟	5760 (128)	5175 (115)	4500
富山	7311 (104)	7030 (100)	7030
関東 栃木	4376 (94)	5027 (108)	4655
群馬	6574 (83)	8237 (104)	7920
茨城	10189 (95)	10832 (101)	10725
山梨	12846 (117)	13420 (117)	11470
四国 香川	8003 (104)	7618 (99)	7695
九州 大分	6300 (84)	7275 (97)	7500
熊本	7649 (93)	9212 (112)	8225
鹿児島	5160 (120)	5160 (120)	4300

(注) () 内は「ケンタッキー31」の収量を100としたときの比数。(値は1970, 1971年の1年間平均合計生草収量kg/10 a)

ホ 幼苗の草勢がすぐれているため、定着が容易である。また、晩生でありながら早春の草勢がすぐれ、早く放牧を開始することが可能であり、とくに春季のDDMおよびTDN収量が高い。また出穂期に刈取った場合、DCP収量は「ケンタッキー31」の50%近い増収をあげる例も示されている。

〔利用上の注意〕

北海道、東北、北陸の積雪寒冷地帯全域および関東以南の標高500mあるいはそれ以上の山間傾斜地が適応地域である。主として肉用牛あるいは子牛育成用の放牧地に適する。とくに関東以南の標高の高い所で従来の品種では、冬枯れを起こす危険のあるような場所にも適応する。なお、夏枯れには弱いので、暖地の低標高草地での利用には不向きである。「ケンタッキー31」にかわり寒土に強い晩生の優良品種として奨励されることになった。

ヤマナミ (トールフェスク農林合2号)

「ホクリョウ」と同じく、農林省北海道農業試験場において、アメリカおよびカナダより導入した品種を素材に、早生で再生力の強い耐病株の選抜を重ね、最終的には27株を選んで合成品種としたものである。

〔特性の概要〕

全国的に高収を示す、きわめて広域適応の品種であり、標準品種の「ケンタッキー31」より約10%の増収が期待できる優良品種で、主要特性はつぎのとおりである。

イ「ケンタッキー31」よりもさらに2~5日早く出穂期に達する極早生系統である。

ロ 収量の季節分布が良好で、放牧地にとくに適する。

ハ 葉の病害に対して「ケンタッキー31」よりやや強いが、雪腐れ病には弱い。

ニ 夏枯れには、きわめて強い抵抗性を示す。

ホ 草丈は「ケンタッキー31」と同様、あまり高くない。葉は細く多葉性とはいい難いが、葉色は濃く、かつ春先のDCP収量では「ケンタッキー31」よりも50%近い増収をあげる例も示されている。

ヘ 種子収量は「ケンタッキー31」よりもかなり高く、また麦角病の発生はみられず、増殖上きわめて有利である。

〔利用上の注意〕

全国的に適応するが、とくに北海道では道南および日高地方の山間地帯などで、夏期に牧草の生育が停滞するようなところ、東北以南では比較的低標高地にも好適である。主として肉用牛あるいは子牛育成用の放牧地に適する。なお冬枯れには、多少弱いので、秋播地帯では播種期がおくれないよう注意が肝要である。「ケンタッキー31」にかわる夏枯れにきわめて強い早生の優良品種として奨励されることになった。